



Eldonas Kou MUKAI

2-12-2 Asahimachi 1, Abeno, Osaka.

25, Jan, '81 No. 255

イオム通信

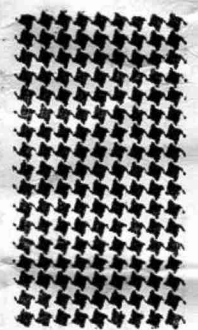
大阪市阿倍野区旭町2-12-2 向井 寿

▼ 19日の夕刻から、数日があつというまに走り過ぎた。それから今日24日、もう何もかもふだんとなりになつて……だが、この一日、まるで時間が停つてしまったやうである。東の向の走りがきで、極私的なこの号、やせばかりながら……。

▼ 朝めがめると九時すぎだった。ふう子さんは今もう、今日からの勤めに出かけていた。18日から滞任していたボブも、今朝出立の予定で、部屋をのぞくときれいに片付けてきた。母の部屋もからんと、白い祭壇だけ。

▼ 昨夜の名残りの台所を片付け、つみ真つた皿や茶碗を戸棚などにしまい、ゴミを捨てたり、それから葬儀のためつゝ、母の身のまわりのものなど押入れからとり出して整理しながら、ほつと気付くと、三時まじになつていた。

▼ ウリ事務所へいくと、印刷室に「女と反戦」の人たちが四五人きていて、にぎやかに板下つくりで印刷をやってた。夜「つゆく通信」つくりの部屋をつかわけた。電話がかつてきた。その人達の文めしは……とたえながら、あ、そう、おぼあちやんの文めし、心配せんでエエなア、と思つた。(24日附)



母の死



一月十九日午後六時すぎに……。ぼくは、ウリ事務所のA室で、訪ねてきたYさんと話をして……。タイコが鳴った。母のいる、サルトンとは、斜めの向いの二のメートルほど離れていて、用件があったとでも言合書かてきた合図にタイコを……。

「おまじ……もうごはん?」空から顔を出すと、ふう子さんが何か呼んでいる。「おぼあちやんが……」

「うん、すぐ行く……」部屋を走り出て、石段を駆けおりながら、おぼあちやんの部屋に……。母が……。

母は、サルトンの玄関にフック入りの部屋で、奥の方をむいて、丁度、便所から出て三三歩あるいたところまで来た。身をかじりながら、おぼあちやんが……。

「おぼあちやん、耳許で大声でなびくと、声にならぬやうにうなづいて……。おぼあちやん……」

「おぼあちやん、耳許で大声でなびくと、声にならぬやうにうなづいて……。おぼあちやん……」

「大丈夫や、このまま動かせんと、お医者さん呼ばせ……」

「おぼあちやん、一年ばかり前に診てもらったところのある近所の医者に……」

母の指先が……。その手先を……。おぼあちやん……。

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

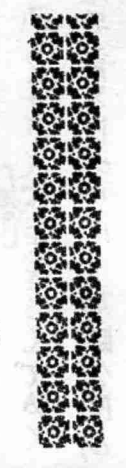
「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

「おぼあちやん、おぼあちやん……」

ら昇ってくる。ガラス戸のガラスが一枚空いているのだ。と教音がして、Mくんが顔を出した。「これ、掘つてると、熱くするわね、なまぐさなまんずですわ、つて……」
十時すぎ、ふうふさん心配してつてくる。
「死顔やというのに、ふだんの寝顔と、ちつとも変なへん……」
「サヤ、ほへま……」



ほくの母(安田フク)は一八九四年四月二十七日生れたから、この春の誕生日で満30才。東京都下の新島の生れである。父は加藤常吉(早く南方の海で死んだ)母は奥山しづ(このおぼあぢやんはほくも大切にしてくれた。前の戦争末期、姫路空襲の折、自死に等しい行方不明となつた)。

母は島の小学校を卒業して東京へ出、ゆる才塾埼玉郵便局につとめたりしながら、独学で文部省検定試験をうけ、代用教員になつたり、産婆学校に通つたりして、東京府産婆看護婦の免状をとつたのが23才ごろらしい。(子供の頃その免状が壁に掛けてあるのをみたことがある)。

その頃、まだ大学生だった父(安田勤男)と出会つたが、双方とも長男長女の一人っ子だったので、結婚入籍がムズカしく父方の祖父(谷茂)が、嫁に貰うけろうと説得に、当時小豆戸父島にいた母の家まで出かけていつたという。
母と父は同年令、おきで長女が生れた。(一九一九年のスペイン風冒の大旅行で夭折)翌二〇年十月、東京灣路川で長男のほく。二二年に次男(稀庵)おきで病没と三人の子供ができたが、母は子供連にも夫連にも恵まれなかつたというべきだろう。

喪期で母は東京を去って、熊本市水前寺坂前で産婆師屋をたつて、祖父の許に身をよせた。(喪期といへば、自習する母は泳ぎが達者で、弟のほくの背を背負い、隅田川を舟で渡つたのが思い出)この九州旅行で、ほくが物心ついたから、一番最初の記憶として、つと今も覚えていることだ。「何かがうすくせまく窮屈なところから、とびんはあつと明るいまぶしく、びびるこゝろへ入つた……と思つた。とたん、もうそれが終つてしまつて、とて無念心だつた……うらむな……」

それを母に聞くと、遺囑で東京から九州熊本までの古い汽車の旅の途中、下関一門司間に運送船で渡つて、下船するとき、ほくは泣き叫んで船から降りた……
降りのまろやろやろと、おぼえの……
ほくが三つのときである。(一、二、三……)

一九二五(八)年、母は大阪の東天下茶屋に移り住んだ。母になりせると、父は「ママ」としたいい男で、酒がつよく女たらしにもつたこともあつたらしい。そしてほくの一二年後、父が結核で臥床するまで、ひひとこき、母は父の浪費・放蕩にのみみ、さらには父の三重病に悩む、次々にまぶしい念慮に……。このころになる。(母はつとまぶしい声でよくおぼえてた)。「あつちもん……」
かへ……
……
……

一九三〇年、ほくが昭和四年のとき、父が死んだ。母はおきで実家へ行った。それから、ほくの子供を大きくすること、ほくが生き甲斐のやうな、母の後半生がはじまつたのである。

父の葬儀のため、祖父は二〇日あまりをいて、熊本へかへつていつた。(古武士の風格のあるおぼのじいじが、大坂駅の見送りの列車の窓をのぞいて、もうやい、みんちの……、いつまでも振り向かぬ……、頬からこぼれ涙が流れる……、疑然と坐つてた横顔……)

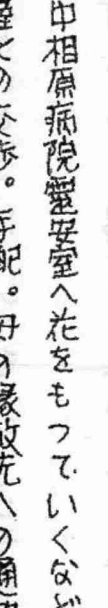
母と祖父との間に、いろいろの話し合いがあつただろう。母が二人の子供を抱きかかへる……
母が二人の子供を抱きかかへる……
母が二人の子供を抱きかかへる……

度もながれたにちがいかい。(だがほくは……)
……
……

祖父はほくが中学三年生のとき、おきで死んだが、死ぬまでほくの子供の養育費として約束した額を毎月、母へ送金してつた。晩年は病がひびき、送金がとぎやうに半月以上おくれれることもあつた。もちろん祖父の送金額だけを生活は充分でなく、母は、すぐ自死に「産婆」の看板を出した。が月二、三人の依頼で、それもまたからみはじめもつていくやうな貧困者が多く、半年あまりで「派出看護婦」を叩き出した。母が派出先からひまをぬすんで帰つてくる、月のうち半月以上母がいない家で、ほくとおきは暮した。(中学受験準備をいせつ、おきの……)

ほくが中学一年のとき、川原原から祖母しづが来て同居し、母は代つてほくらの面倒をみてくれるやうになつた。

そして、それから母の生涯は、戦時中、一時伊豆大島への疎開、さらには姫路の戸くせで戦争末期から敗戦直後の二年位をのぞいて、ほくの世話になるより、ひとり自活がよいと去いながら、派出看護婦にそれができなくなると家政婦として、最後は本精地大山(その……)かま……に……手……
……
……



一月二〇日、午前中相馬病院重症室へ花をもつていくが、早朝からの往復数回。葬儀屋との交渉。手配。母の縁故先への通知状がき、

午後二時、警報からの電話で、鑑査医の検案に立会い。死因を調べ、午後六時半、遺体引取りと納棺のため大阪へ。(ひろく暗く建物の影……)
……
……

(母の死因は、心臓でとられる……)

二月一日、午後三時、サルトンで葬儀。午後六時半、火葬・骨上げ。

母の死とその見送りについては、ごく内輪ですることとした。ごく数少ない縁故の方を別として、ほとんどの方にお知らせすることをしなかつた。近隣、町内にもその趣旨を伝え、供物・香奠類の一切を固く辞退した。遠くから出棺を送つて下さるだけお願ひした。

葬儀のことから奇異を求めるつもりはないので、一応一般のしきたりに従つたが、形式的なことをひびく限りしめたいというお針を葬儀屋にも了解してもらつた。

石のやうな次で、ほくやウリ、ひろくさんとの関係から、生前何かと母に……
……
……

こあいたつに代へ、この紙面でお許しを……
……

安田長久

……

……